共通授業　川邊 暁美　先生

神戸市生まれ。神戸女学院大学卒業後、NHK神戸放送局ニュースキャスター。1989年、全国初の県政のスポークスパーソン「兵庫県広報専門員」として、広報・講演活動を展開。2008年、声と言葉のコミュニケーション力、表現力UPをベースにした人材育成、コンサルティングを行う「言の葉OFFICEかのん」を設立。「伝わる声と話し方」をトータルで指導できる講師として、講演、セミナーや企業研修などに幅広く活躍中。神戸女学院大学非常勤講師。

インタビュー当日は、川邊先生の「声で握手♪相手の心に響く話し方」と題した３年生の共通授業があり、一般の聴講者や1・2年の聴講生でカレッジホールはほぼ満席状態のなか、ご自身の経験を踏まえて伝わる話し方のポイントを講義していただきました。

Q　現在の活動をされるきっかけを教えてください

皆さんはNHKでアナウンサーをするくらいだから幼い頃からきれいな声だったのでしょう、とお思いかもしれませんが、実は声にコンプレックスがあり、無口で引っ込み思案な、いじめられっ子でした。転機は高校１年生の音楽の時間に先生からの「個性的な声やなあ」「君は君のままでええんやで」という言葉でした。それからコーラス部に入り声が出るようになると周囲から存在を認められるようになり、その頃から言葉や声で伝えることを仕事にしたいなと思うようになりました。

Q　兵庫県の広報専門員の時に阪神・淡路大震災を経験されたわけですが一番印象に残っていることは何ですか

震災の２日目になって、サンテレビやラジオ関西から災害対策本部の情報を発信できるようになりました。同じように被災した人間が伝えていたからでしょうか、その時の反響は大きく「あなたの声で安心した」「川邊さんの姿を見てもう大丈夫だと思った」などたくさんのお電話をいただいたのが印象深く心に残っています。

Q　現在の活動は大きく分けて、研修・講演と朗読の2本柱ですが、それぞれどういったことを伝えたいですか

研修・講演で伝えたいことは、声や言葉が変われば伝わり方が変わる、伝わり方が変われば人生が変わるということです。朗読では、日本語の美しさを未来に伝えたいということ、それともう一つ朗読は健康長寿につながる、つまり口元のフレイル*対策になるということです。

＊健康な状態と要介護状態の中間の段階を指す（厚労省HPより）

Q　朗読をライフワークにされていますが、朗読する際に心がけておられることを教えてください

こちらにも朗読クラブがあるとお聞きしていますが、私が一番大切にしていることは、作品を読み込んで理解することです。その際、私はいきなり声に出さないようにしています。声に出すとそれがベースになってしまいます。作品を何度も読み込んでその背景や作者の心情を読み取っていく、作者は何を表現したかったのかを解釈することです。そのうえで、読み手を通して作品の世界を聴き手に届けることです。

Q　本学の学生に伝えたいことやアドバイスがあれば教えてください

相手に合わせて言葉を選んで、伝わるように伝えること。こちらの学生さんは地域で積極的に活動されていると聞いています。その際いろいろな場所や年齢の人に合わせた伝え方を身に付け、引き出しを増やす工夫をしていただければと思います。

また、身近な人とのコミュニケーションこそ、主語を入れ聞き取りやすい言葉で伝えることが大切です。

Q　これまで活動されてきた中で印象深いことについてお聞かせください

NHKを退職する最後の日、番組を降りるアナウンサーは最後に「今日が最後になります」などのコメントを入れるのですが、私は最後のあいさつをせずにいつものように番組を終えました。すると、直後に電話が掛かってきました。目の不自由な方からで「毎日あなたの声を楽しみに聞いていた。番組の改編期なので心配でしたが、さよならを言わなかったので、来週からも楽しみです」という電話でした。今日が最後の番組と伝えると相手の方は絶句してしまい、この時ほど後悔したことはありませんでした。声と言葉を受け止めてくれる人の存在に心を寄せることの大切さを胸に刻みました。

Q　これからの夢や、やりたいことを教えてください

歴史ある建物が次々姿を消しているので、そういった建物の活用方法の一つとして朗読をすることで建物の価値を感じてもらう活動をしています。最近では舞子公園の中にある国の登録有形文化財の「旧木下家住宅」で私の趣味でもある着物を着て朗読会を開催しました。ただ、こういった建物は一般利用するのにハードルが高く、良い情報があればぜひご紹介ください。

（国際31期　安田、浅井）